

ワキ史小考

——寛正ノ文明の大量引き抜きをめぐって——

天野文雄

能楽史上、比較的よく知られている事件に、文明年間の後半に上意によって有能なワキがあいついで観世座に引き抜かれた事件がある。すなわち、將軍義尚政下の文明十三年（一四八一）金剛四郎次郎元正が金剛座から、同十五年日吉源四郎と守菊弥七郎が金春座からそれぞれ引き抜かれたのがそれで、いかにも観世座が將軍愛顧の猿楽であったことを象徴する事件である。この強引な引き抜きについては、つとに観世座におけるワキの払底という背景が指摘され（小林静雄氏『室町能楽記』昭和10）、また最近では能の音曲面におけるリーダーとしてのワキの重要性がこの背景にあったとも指摘されて（表章氏「能の同（音）と地（語）」『国語と国文学』昭和60・4）、研究の上でもそれなりの注意が払われてきているが、この引き抜きに先行する形で起きているワキ役者の大量引き抜き（もちろん観世座への）についてはあまり注意されることがないよう

である。そこで、右の三例をも含む寛正ノ文明にわたる一連のワキ役者引き抜きの実態を紹介し、あわせてその背景などについて考えてみたいと思う。

ワキの引き抜きについて最も多くの事例を提供してくれるのが観世庄右衛門元信編の『四座役者目録』（正保3成立）で、同書によれば既述の金剛四郎次郎の他に、金剛弥五郎、矢田六郎、とく守菊三郎、生一孫四郎、生一小四郎（以上観世方ワキの項）、生一小次郎（宝生方ワキの項）の観世座への引き抜きが確認もしくは推定される。このうち矢田六郎、守菊三郎、生一小次郎には「被召上」と上意による転座であることが明記されているが、他にも同様の事情を考えてさしつかえないと考える。上意による転座の明証が他にある金剛四郎次郎の場合もここではそのことが明記されていないのである。なお、生一小四郎は生一小次郎と同人の可能性もあろう。また、生

一小次郎の場合は一度引き抜かれたものの、謡顔が恐しいとの理由で宝生に戻されているから一時的な転座であった。彼らの活躍期にはそれぞれ前後があるが、ほぼ寛正ノ文明の時期に収まるかと思う。この他に、義尚が広沢尚正の名を与えて取りたてた猿楽彦次郎の例がある。彼は金剛四郎次郎の倅であったが、文明十六年に「観世大夫座者彦次郎」と呼ばれているから（『後法興院記』）、父親の四郎次郎とともにワキ役者として観世座に転座させられ、その後義尚の寵愛を受けるようになったものと考えられる。また、寛正五年には何座の誰か不明であるが、同年の観世座による乳河原勸進猿楽に備えて有能なワキが上意で観世座に加えられている事実もある（『蔭涼軒日録』寛正5・3・20等）。

以上、知りえたワキ役者の引き抜きは十一例、それがほぼ寛正ノ文明の頃に集中しているのである。これがいかに異常な現象であるかは、ワキ方以外の引き抜き例と比較すれば一目瞭然となる。『四座役者目録』から他役の事例を拾ってみると、太鼓方で神竹の伯父の金春三郎、小鼓方で美濃権守（のち金春座に復帰）、宮増弥左衛門（以上いづれも金春座からの転座）があり、狂言方に越前猿楽から召しあげられた犬若大夫があつて、これがワキ方以外の引き抜きの総計なのである。時

代幅もワキの場合より大きい。もって寛正（文明）に集中しているワキの引き抜きがいかに特異な現象であるかが理解されるであろう。

さて、先学の指摘する通り、この背景に観世座のワキ不足があることは明白である。現に、金剛弥五郎から矢田六郎、弓菊三郎、金剛四郎次郎、生一孫四郎と続く観世座ワキ歴代は、すでにみたごとくいづれも他座出身のワキばかりなのである。観世座は次の弥次郎長後に到ってようやく自座出身の名ワキを持つわけである。そうした現象は四座中で観世にだけ認められるのだが、それは観世座だけが座内でワキを養成せずとも、他座の優秀なワキをいつでも引き抜けるという状況にあったためにほかなるまい。観世座のワキ不足は観世座がおかれていたそうした特権的状况と表裏一体の関係にあったと理解できるであろう。だが、それだけで寛正（文明）の大量引き抜きは説明しきれない。依然として残る疑問は、この引き抜きがなぜワキに集中し、またなぜ寛正（文明）という時期にそれが集中しているのか、である。

『習道書』などから窺われるところ。それがいつから現在のようなワキ専門の役者が生れたかであるが、『四座役者目録』によると、四座のワキの初代は次のごとくになっている。

観世Ⅱ金剛弥五郎（長祿（寛正頃活躍か）  
金春Ⅱ日吉与四郎（文明11没）  
宝生Ⅱ生一（文明頃活躍か）  
金剛Ⅱ又七（文明頃活躍か）

このうち金剛弥五郎と日吉与四郎の項にはそれぞれ「観世方脇初也」、「金春方脇初也」とある。すなわち、四座における專業ワキ役者の始祖がこの四人であると理解されるのである。金剛座は本来なら金剛四郎次郎が初代であるべきだが、引き抜きで観世座に転じたためここには登載されていない。又七の活躍期が他の三人よりおくれるのはそのためである。金剛座の初代に金剛四郎次郎を配すると、四座の專業ワキ初代の活躍期は観世の金剛弥五郎がやや早いようだが、これもほぼ寛正（文明）の頃に重っている。すなわち、ワキの專業化の時期もほぼその頃と考えてよいことになる。一連のワキ引き抜きは、ワキの專業化の時期にあたっていたわけなのである。要するにこういうことになろうか——。観世座はワキの專業化という新事態に際し、しばらくの間は他座からの引き抜きをもって対処しようとした（観世座のみそれが可能だった）と

ころが、そうした方式は演能におけるワキの重要な役割からしても種々の弊害を惹起せしめたことであろう。そこで、観世座はようやく座内でワキを養成してワキの強化を図ろうとする。金剛四郎次郎や日吉源四郎の引き抜きにはそうしたねらいもあつたろう（弥次郎は金剛四郎次郎を師としている）。その成果が名人弥次郎長後の出現となった。一連のワキの引き抜きにはこうしたワキをめぐる状況の推移が背景としてあつたと考えられるのである。

なお、ワキの專業化の契機は不明だが、それは演能におけるワキの役割の増大と一体であつた可能性が高い。その役割増大の要因としては、本日の「紅葉狩」のようにワキの活躍する能の出現がこの頃だということもあるが、より根本的にはワキの職能の変化が考えられる。ワキの職能については表章氏の前掲論考が示唆に富むが、同論考をふまえて、ありえたワキの職能の変化を想定してみると、たとえば、シテがそれまでワキや地謡と一緒に謡っていた同音を謡わなくなり、同音の統率者であつたワキの役割が相対的に増大した、といった変化（それは漸層的に進行したろう）などが考えられるところであろうか。

（上田女子短期大学講師）